

平成22年5月28日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520124

研究課題名（和文）上代文学における漢字使用の総体的研究

研究課題名（英文）General study of the "KANJI" use in the Japanese Ancient Literature

研究代表者

村田 右富実 (MURATA MIGIFUMI)

大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号：30244619

研究成果の概要（和文）：

本研究は、上代文献に用いられている漢字の総体をどのように把握しうるかについてのものである。

総体把握のためにはその前提となる、平準化された上代文学諸作品のテキスト・ファイルが必要であるため、この整備を行った結果、ほとんどの作品において平準的なユニコード・テキスト・ファイルを構築した。この結果、上代文学諸作品を横断的に検索することが可能になり、研究効率は飛躍的に上昇した。

また、こうした平準化されたテキストを得ることができたため、多変量解析を利用した文学研究が可能になった。これは研究成果⑤に結実した。

研究成果の概要（英文）：

This study is for the whole understanding of "KANJI" which is used in ancient Japanese literature. And this study needs leveled Unicode text files. Building leveled Unicode text files was so difficult because of "GAIJI" and "ITAIJI". But at last these files have been completed. It enables us to search across the literary works.

Certainly, searching across the literary works shorten the time to comprehend some contents, but it's not the purpose of this study. Those Unicode files enabled the introduction of the multivariate analysis in the literary study. This is the maximum result of this research.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,200,000	630,000	3,830,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：国文学・国語学・上代文学・万葉集・漢字

1. 研究開始当初の背景

文学研究におけるコンピュータ利用は、その必要性について認識されてはいたが、単なる検索マシンとしての利用に留まるものであった。こうした現状に危機感を抱き、コンピュータを文学研究に積極的に利用する方法を考えていた。

2. 研究の目的

上述の点を推進する基本はなによりも正確なテキスト・ファイルにある。研究代表者の主たる研究分野は上代文学であるため、正確な漢字テキストが必要になる。しかし、各作品が個別的に入力されているため、例えば「予、豫」、「劔、劍、劔、劍」といった異体字を平準化したテキストが存在しなかった。これらを平準化したうえで、上代文学の文字使用における統合的なモデルを構築し、上代漢字使用層の全体像を提示することを目的とする。

3. 研究の方法

一般的に、研究の目的や最終形態とされがちなテキスト・ファイルの完成を研究の出発点におく。すなわち、上代文学の代表的四作品（万葉集、古事記、日本書紀、風土記）を先述の平準化されたテキスト・ファイルとして作成し、統計学的アプローチも含めて、統合的に調査・研究する。

4. 研究成果

研究発表については、その後活字化しているものがほとんどであるため、論文と著書について中心的に記す。

まず、論文について述べる。

⑩「万葉集巻九の配列について」（美夫君志, 74号, 2007）では、これまで成立論とウラオモテの関係で論じられてきた歌の配列の問題を、徹底した文字列レベルの比較を前提として、静態として捉えた。

⑨「『天皇の崩ります時に、大後の作らず歌一首』について」（『初期万葉論』2007）では、緻密な用例調査を基本として表現論と時間論とをあわせ論じた。

⑧「万葉集巻一後半部（五四～八三番歌）の配列について」（『万葉語文研究』, 3号, 2007）では、これまでこれといった配列原理はないといわれていた万葉集巻一後半部は、複数のスタンダードによって成り立っていることを論じた。ここでも、本研究の調査が

前提となっている。

⑦「筑前国の志賀の白水郎の歌十首について」（『美夫君志』, 76号, 2008）は、特定のストーリーを歌群が構成しているのではなく、歌群がストーリーを紡ぎ出して行くという立場に立ち、新たな白水郎歌十首像を提示した。ここでも、文字列レベルの用例調査が大きな役割を果たした。

⑥「神亀四年正月の雷電」（『百舌鳥国文』, 20号, 2009）は、ややもすると固定的、保守的になりがちな歌のヨミをリビルドすることを目的として記された。確かな用例調査を背景に、当該歌の独自の方法について記した。

⑤「カイ二乗検定を用いた万葉短歌の声調の分析」（『万葉』, 204号, 2009）は、本研究の最も大きな成果である。これまで主観的にしか論じることが不可能であった「歌調」を、多変量解析を用いることによって、客観的な指標のもとに数値化できた。この研究方法は、万葉集に限らず、平安時代以降の和歌にも適用できるため、今後、さらに研究が進むと思われる。

④「神亀二年の吉野行幸歌論―笠金村作を中心の一」（『北海道大学国語国文研究』, 136号, 2009）は、「神」についての表現史を追うことによって、万葉集第三期の「神」の表現性を理解することに目的があった。これまでいわれていた「神」の把握は、重要な用例の見落としがあったため、不完全であったことも判明したが、この用例は、本研究が着実に進んでいったため、容易に発見するに至ったものである。

③「柿本人麻呂泣血哀慟歌B群の達成」（『万葉集の今を考える』, 2009）は、これまでA群との比較で、ややもすると低く見られていたB群について、集注の用例を丹念に追うことによって、その独自の達成を論じたものである。

②「日本語韻文書記についてのモデル論構想」（『文学・語学』, 196号, 2010）は、最近、発見が相次いでいる日本語韻文の記された木簡を中心に、日本語韻文の書記史をモデル論的に論じたものである。特定の文字列が韻文であるか否かの認定については、細かな用例調査が基本となるため、本研究の成果が多用されている。

①「車持千年の養老七年吉野行幸歌」（『奈良女子大学序説』, 37号, 2010）は、これまで長歌に従属すると考えられがちであった反歌について、長反歌全体で論じるべきであることと、反歌の種類によって作品全体の読みが左右されることを、それぞれ長反歌の用例

について確かめたものである。数多い反歌の用例から必要な用例を導き出すためには、今回作成した平準化されたテキストが不可欠であった。

つづいて、著書について述べる。

②廣川晶輝氏との共著『南大阪の万葉学, 著書』(大阪公立大学共同出版, 2007)は、万葉集の作品を地域学研究の一部として読み直すことを試みたものである。単なる概説に終わることなく、実地踏査を主体としつつも、南大阪に広がる万葉歌を全て調査し、必要な作品については、作品論を施した著となっている。

①内田賢徳氏, 坂本信幸氏, 鈴木榮一氏, 西端幸雄氏との共著『万葉集電子総索引 CD-ROM 版』(塙書房, 2009)は、万葉集の研究史上初めての CD-ROM 版の総索引である。単なる文字列の索引ではなく、品詞別は勿論のこと、活用形を限定して引くことや、特定の歌や巻を絞りこんだ上での用例調査も容易にできるようになっている。この索引の登場によって、万葉集研究は新しい局面を迎えるであろう。

以上、主な研究成果について、論文と著書とに分けて論じてきた。この他にもまだ 10 件を越える成果があるが、今は割愛する。

述べてきた研究成果に如実に表れていることは、平準化されたテキストの重要性である。平準化されたテキストが存在することによって、上代文献の横断的検索が可能になったため、より正確な用例調査が可能になったことは、研究を進める上で、非常に大きいといつてよいだろう。

また、⑤「カイ二乗検定を用いた万葉短歌の声調の分析」は、これまでの文学研究の概念を大きく変更するものである。本研究で構築された平準化されたテキストを用いて、さらに多変量解析を文学研究に導入することを考えている。たとえば、八代集について、まったく同じ多変量解析を施し、歌調の変遷を論理化することである。こうした新しい研究方法が一般化するためには、さらなる平準化が必要となるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 25 件)

- ① 村田右富実, 車持千年の養老七年吉野行幸歌, 奈良女子大学序説, 査読有, 37号, 2010, 87-102
- ② 村田右富実, 日本語韻文書記についてのモデル論構想, 文学・語学, 査読有, 196号, 2010, 101-111
- ③ 村田右富実, 柿本人麻呂泣血哀慟歌 B 群

の達成, 『万葉集の今を考える』, 査読有, 2009, 246-260

- ④ 村田右富実, 神亀二年の吉野行幸歌論—笠金村作を中心に—, 北海道大学国語国文研究, 査読有, 136号, 2009, 1-13
- ⑤ 村田右富実, カイ二乗検定を用いた万葉短歌の声調の分析, 万葉, 査読有, 204号, 2009, 23-41
- ⑥ 村田右富実, 神亀四年正月の雷電, 百舌鳥国文, 査読有, 20号, 2009, 99-115
- ⑦ 村田右富実, 筑前国の志賀の白水郎の歌十首について, 美夫君志, 査読有, 76号, 2008, 18-32
- ⑧ 村田右富実, 万葉集巻一後半部(五四～八三番歌)の配列について, 万葉語文研究, 査読有, 3号, 2007, 11-37
- ⑨ 村田右富実, 「天皇の崩ります時に、大後の作らず歌一首」について, 『初期万葉論』, 査読有, 2007, 316-335
- ⑩ 村田右富実, 万葉集巻九の配列について, 美夫君志, 査読有, 74号, 2007, 43-62

[学会発表] (計 10 件)

- ① 大浦誠士、新沢典子、村田右富実, シンポジウム「枕詞」とは何か, 美夫君志会, 2010/1/24, 中京大学
- ② 村田右富実, 書かれた漢字、読まれる日本語—モデル論としての日本語書記史—, 国際学術講演会「漢字文化圏の中の日本古代文学」, 2009/11/28, 北海道大学
- ③ 村田右富実, 車持千年の養老七年吉野行幸歌, 万葉文化学研究会, 2009/8/26, 大阪府立大学
- ④ 上野誠、新沢典子、村田右富実, シンポジウム・宴席歌の周辺, 美夫君志会, 2009/1/25, 中京大学
- ⑤ 村田右富実, 伝説を語る、伝説を記す、伝説を歌う—浦島子を中心に—, 万葉文化学研究会, 2009/1/11, 万葉文化館
- ⑥ 村田右富実, 人麻呂にとって挽歌とは何か, 美夫君志会, 2008/11/9, 中京大学
- ⑦ 村田右富実, 万葉和歌の音調について—多変量解析と和歌—, 万葉文化学研究会, 2008/3/21, 万葉文化館
- ⑧ 村田右富実, 神亀四年正月の雷鳴——6・九四八～九四九番歌について——, 上代文学会, 2007/11/11, 日本女子大学
- ⑨ 村田右富実, 筑前国志賀白水郎歌十首について, 美夫君志会, 2007/7/7, 中京大学
- ⑩ 村田右富実, 万葉集巻一後半部の配列について, 万葉文化学研究会, 2006/8/22, 万葉文化館

〔図書〕（計 2 件）

- ① 内田賢徳, 坂本信幸, 鈴木榮一, 西端幸雄, 村田右富実, 『万葉集電子総索引 CD-ROM版』(埴書房), 2009
- ② 村田右富実, 廣川晶輝, 『南大阪の万葉学, 著書』(大阪公立大学共同出版), 2007

〔その他〕

ホームページ等
特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村田 右富実 (MURATA MIGIFUMI)
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号：30244619